

4 質問項目に対する調査結果

調査結果については…

(基本方針) 53分団ごとに分析

(地図の下部に記載)

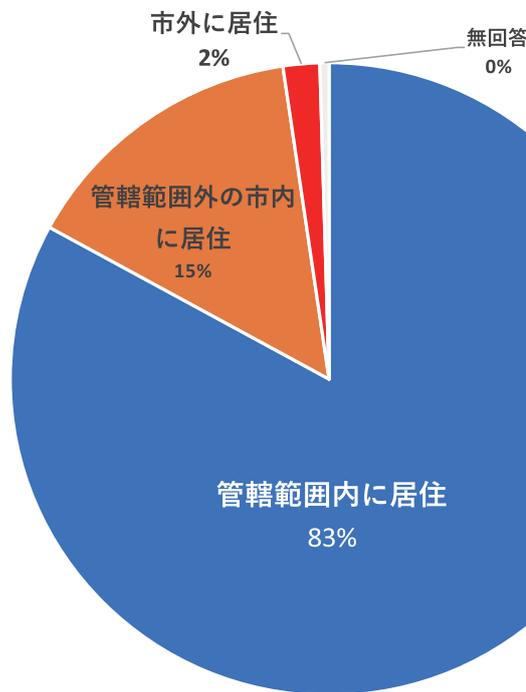
- 上越第一、第二、第三、第四分団 (左下)
- 幹部、女性団員、ラッパ隊、事務所 (右下)
 - * 幹部：消防団幹部、方面隊幹部
 - * 女性団員：消防団本部所属。啓発活動等を中心に活動
 - * ラッパ隊：7方面隊に所属。行事での演奏を中心に活動
 - * 事務所：市役所及び事務所消防隊。市役所及び9方面隊に設置。
日中の勤務時間を中心に活動

上越市
消防団適正配置検討委員会

調査報告書

問1

消防団員の「居住地」



問1.消防団員の「居住地」

1. 質問項目を設けた経緯:地元に住んでいない団員がいる

ヒアリング調査において、「地元に住んでいない団員がおり、いざというときの駆けつけの支障となるのではないか」との懸念が示された。具体的には「仕事がちばに移ることで、団員の居住地が管轄範囲外に移動することが多い」「原則から言えば管轄範囲外に居住地が移る場合は、退団もしくは分団自体を移ることが望ましい」「一方で、団員の確保も難しくなっており、居住地が移った場合でも、元の分団への所属をお願いすることがある」という実態があることがわかった。

2. アンケート調査項目:消防団員の「居住地」

- お住まいに関する質問。(数値は「はい」と回答のあった数) N(総数)=3,452問 1. お住いの場所を教えてください。(1つだけ選択)
 - ・所属する分団の管轄範囲内に住んでいる 2,864
 - ・所属する分団の管轄範囲ではない、市内に住んでいる 508
 - ・市外に住んでいる 64
 - ※不明・無回答 16

3. 調査結果(円グラフ・全体):管轄範囲内に居住している団員は、全体の83%

「所属する分団の管轄範囲内に住んでいる」と答えた人は全体の83.0%、「市内の管轄範囲外に住んでいる」と答えた人は15.0%、「市外に住んでいる」と答えた人は2.0%であった。この結果は、ヒアリングで「多くの」分団が懸念を示していた割には、いまだ8割の団員が管轄範囲内に住んでいることがわかり、消防力維持の観点からは、ほっとする結果となった。

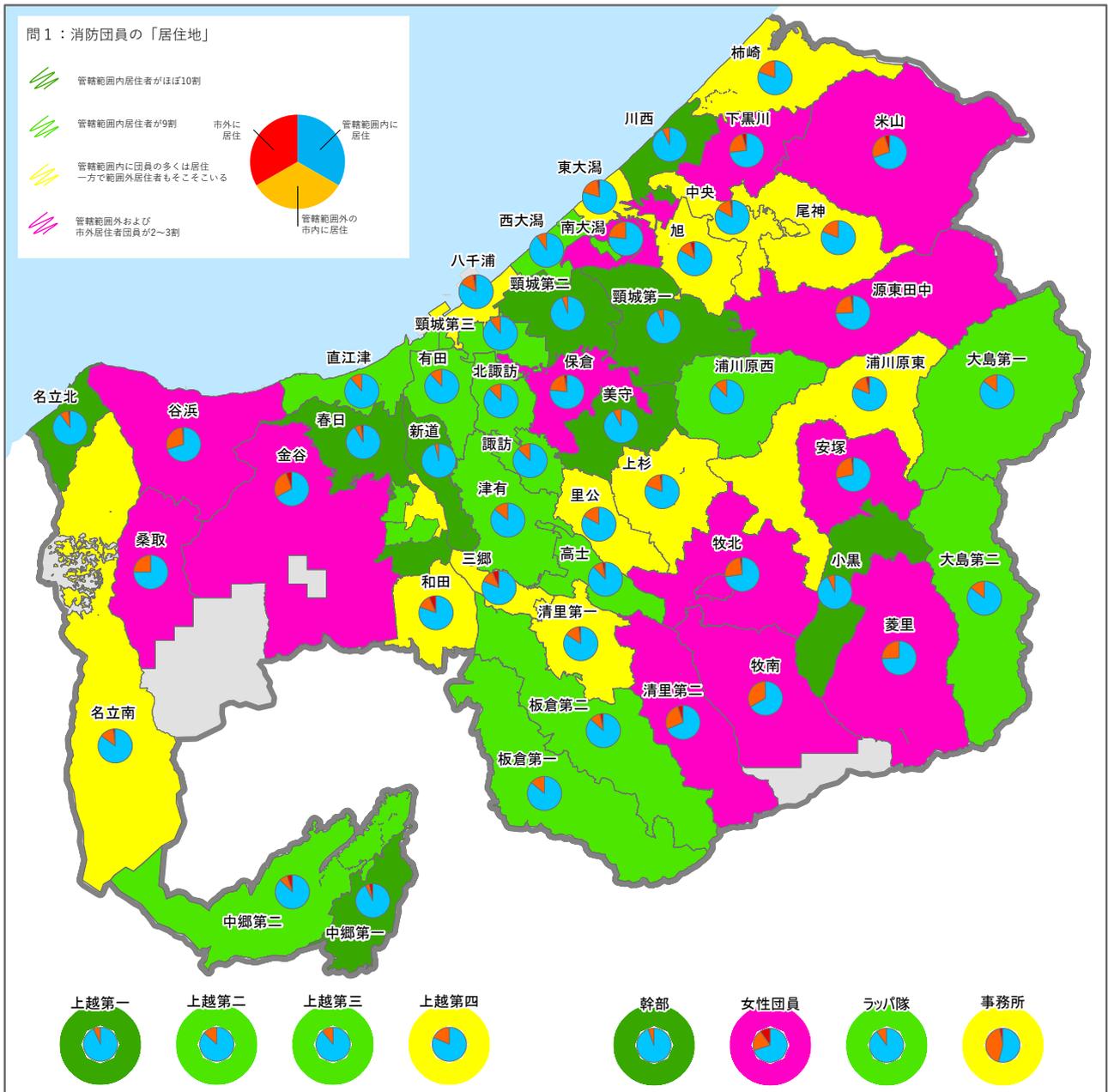
一方で、15%もの消防団員が管轄範囲外に居住していることが明らかになり、地域によっては、初期消火に関しては「絶望的」とも判断される結果となった。また「市外居住」の2%に関しては、もはや団員として機能を果たすことは難しいと判断される。

4. 調査結果(円グラフ・分団別):3割の団員が管轄範囲外に居住している分団がある

「所属する分団の管轄範囲内に住んでいる」割合が多かったのは、上越新道分団の96.3%、次いで頸城第二分団の94.3%、消防団幹部の94.3%であった。これらの分団ではほとんどの団員が地元に住んでいる。

一方で、最も「市内の管轄範囲外に住んでいる」と答えた人の割合が多かったのは、事務所分団の42.9%であった(事務所分団はもともと職場で結成されており、管轄範囲内に住んでいない団員が存在することが前提として結成されている。事務所分団は、日中において、行政職員が中心となり機動的に活動することに重きが置かれている)

事務所分団を除くと、最も「市内の管轄範囲外に住んでいる」と答えた人の割合が多かったのは、牧南分団の33.3%、上越谷浜分団の28.2%、上越金谷分団の27.4%であった。これらの分団では、およそ3割の団員が、管轄範囲外に居住している。



5. 57分団の傾向：4つの傾向に分類できる

1) 「管轄範囲内の居住者がほぼ10割」 11分団

(安塚小黑、柿崎川西、幹部、頸城第一、頸城第二、三和美守、上越春日、上越新道、上越第一、中郷第一、名立北)

2) 「管轄範囲内の居住者が9割」 17分団

(ラッパ隊、浦川原西、頸城第三、上越高士、上越諏訪、上越第三、上越第二、上越直江津、上越津有、上越北諏訪、上越有田、西大瀧、大島第一、大島第二、中郷第二、板倉第一、板倉第二)

→団員による夜間消火・災害対応に期待がもてる

地域内における消防団の充足率が高い。夜間における火災や災害において、居住者である消防団員の活躍が期待できる地域。住民の避難誘導や初期消火にも一定の期待が持てる地域。

3) 「管轄範囲外および市外居住団員が2～3割」 14分団

(安塚、安塚菱里、柿崎下黒川、柿崎米山、吉川源東田中、女性団員、上越金谷、上越桑取、上越谷浜、上越保倉、清里第二、南大瀧、牧南、牧北)

→団による夜間消火・避難誘導への期待は厳しい

地域内における消防団の充足率が低い。夜間における火災や災害において、居住者である消防団員の活躍の期待が困難な地域。初期消火より、住民の避難をより優先し、その後は延焼火災を抑えることを考えるべきと判断できる地域。

4) 「管轄範囲内に団員の多くが居住、一方で範囲外居住者もそこそこいる」 15分団

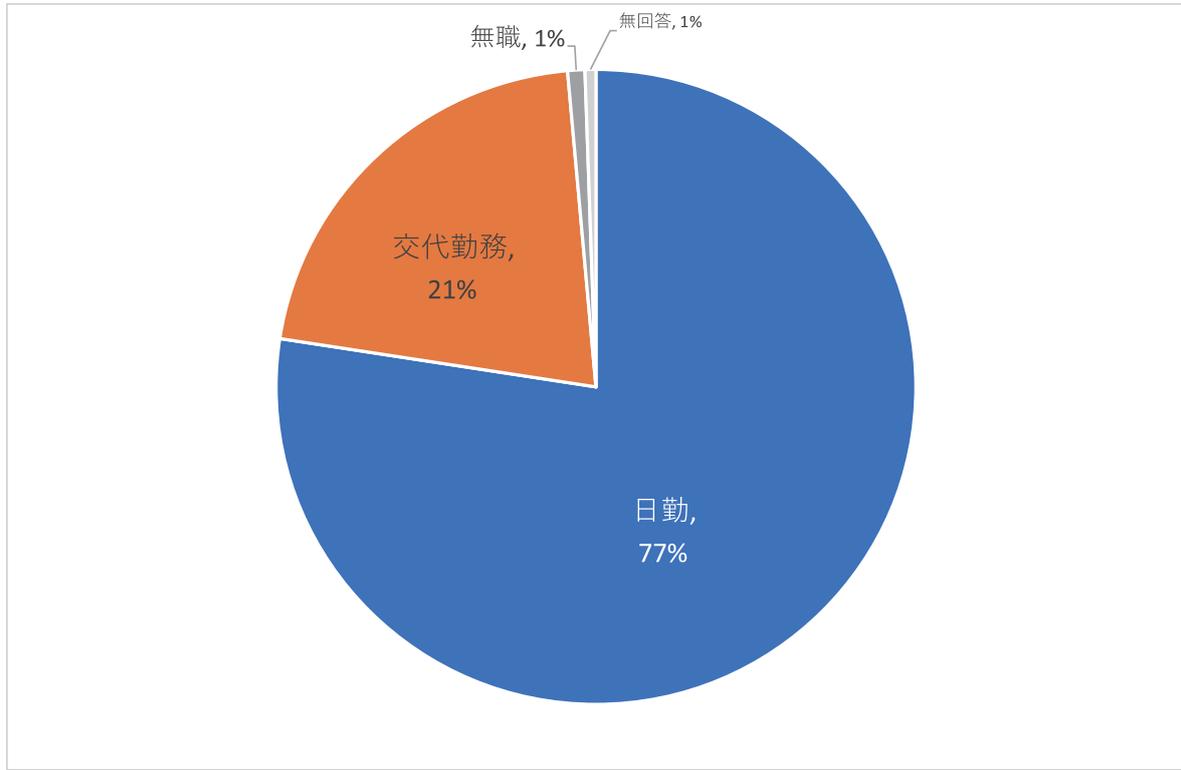
(浦川原東、柿崎、吉川旭、吉川中央、吉川尾神、三和上杉、三和里公、上越三郷、上越第四、上越八千浦、上越和田、清里第一、東大瀧、名立南、事務所)

→居住団員の減少の歯止め重点的に取り組むことが喫緊の課題である

現時点において、夜間の火災や災害において、避難誘導・初期消火において、直ちに心配はないが、今後、管轄区域内居住者で団員の充足が困難になる恐れがある地域。入団の勧誘等に重点的に取り組むべき地域。

問2

消防団員の「勤務形態」



問2.消防団員の「勤務形態」

1. 質問項目を設けた経緯: 団員の活動参加率が減っているのは、不規則勤務が増えたから

ヒアリング調査の中で、「工場勤務やコンビニ勤務等が増えることによって、消防団活動への参加が難しくなる傾向にある」との懸念が示された。特に人口増加傾向にある地域において、これまでの日勤中心の消防団活動では、団員の活動参加率上げることが難しくなっている。「工場勤務やコンビニ勤務に代表される交代勤務の団員が増えてきた」「交代勤務の団員は、消防団の活動に恒常的に参加することが難しく、欠席しがちになる」「交代勤務の人は、不規則勤務になる傾向もあり、活動時間を合わせる事が難しい」「結果、消防団活動への参加者が減る」という実態があることがわかった。

日本社会の人口構成が変化し、高齢化社会が今後も進む中で、介護のニーズも高まり、その変化に伴って、介護の仕事が増えることで、ますます交代勤務に従事する人が増加することが予測されている。よって、消防団活動のあり方をスケジュール的に見直すか、参加形態を再考しなければ、活動への参加率を増やすことは難しいと想定される。

2. アンケート調査項目: 消防団員の「勤務形態」

●お仕事に関する質問。(数値は「はい」と回答のあった数) N(総数)=3,452

2. あなたの勤務形態を教えてください。(1つだけ選択)

・日勤 2,673 ・夜勤 30 ・2交代 227 ・3交代 252 ・その他の勤務形態 221 ・働いていない 19

3. 調査結果(円グラフ・全体): 工場が立地する分団以外にも、団員に占める交代勤務者の割合が増加

「日勤(昼間の勤務)」と答えた人は全体の77%、「交代勤務(夜勤、2交代、3交代、その他の勤務形態)」と答えた人は21%、「無職(働いていない)」と答えた人は1%であった。この結果は、ヒアリングにおいて「工場が立地する」分団が特に懸念を示していたが、全体的に団員における交代勤務者の占める割合が増加していることを示している。

一般的に、交代勤務の実態は「交替制を採用する七一六事業所に計一二三種類の交替制度が存在していた*」という調査もあり、「交替制には、組数、交替数、時間帯、各勤務の順序、一周期の長さ、非番の日数、休日の配置などに応じて様々な種類がある**」ことが知られている。よって、日勤以外の団員が広く参加できるような活動スケジュールを組むことは、現実的には非常に難しいことが想定される。またヒアリング調査でも明らかになったように、介護職に代表される「交代勤務であり、かつ、規則性を持って勤務時間が展開するのではなく、その時々で勤務時間が変化するため、来月の勤務時間が前の月にはわからない」といった「不規則勤務」も存在する実態がわかった。

* 日本産業衛生学会交代勤務委員会、夜勤・交代制勤務に関する意見書、1978.5、産業医学20巻、JaP.J.Ind.Health,Vo1.20,1978

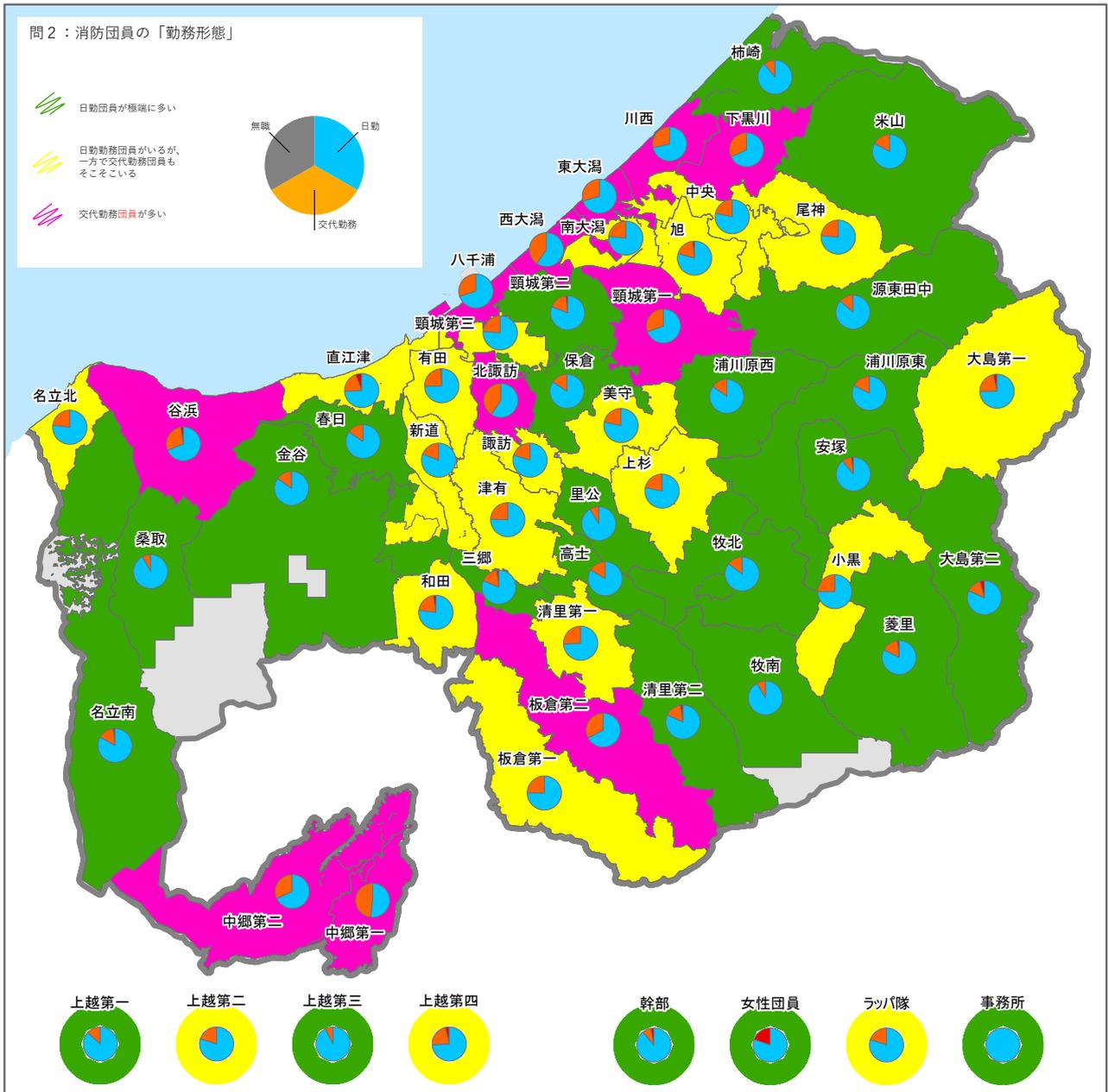
** 吉田 美喜夫、◇論説◇深夜交替制労働の現状と法規制の課題、立命館法学、一九九六年四号(二四八号)、1996

4. 調査結果(円グラフ・分団別): 3分団においては4割の団員が交代勤務、7分団において交代勤務の割合は3割を超える

全分団のうち、「日勤団員」割合が多かったのは、事務所消防隊100%、次いで、上越第三分団の92.3%、上越桑取分団の92.3%、牧南分団の91.7%、三和里公分団の91.4%であった。これらの分団ではほとんどの団員が昼間の勤めであり、消防団の活動スケジュールに合わせる事が可能であることが期待される分団である。

一方で、最も「交代勤務」割合が多かったのが、中郷第一分団の48.2%、次いで西大湯分団の40.6%、上越北諏訪分団の40.4%であった。中郷第一分団は団員のほぼ5割が交代勤務であり、非常に高い割合を示している。次いで、西大湯分団、上越北諏訪分団において4割の団員が交代勤務、次いで5分団において、交代勤務割合が3割を超えていた。5割4割を超える団員が交代勤務であれば、通常の消防団活動への参加率へも、大きな影響が懸念される事態であり、日勤の団員への負担増も懸念される。

消防団員の「勤務形態」



5. 57分団の傾向（不明・無回答は除く）：3つの傾向に分類できる

1) 「日勤団員が多い」 25分団：団員による消防団活動への参画が期待できる

(浦川原西、上越高士、上越第三、大島第二、安塚、安塚菱里、柿崎米山、吉川源東田中、女性団員、上越金谷、上越桑取、上越保倉、清里第二、牧南、牧北、幹部、頸城第二、上越春日、上越第一、浦川原東、柿崎、三和里公、上越三郷、名立南、事務所)
 日勤勤務の団員が多い。分団の80%以上が日勤団員であり、現状においては、これまでの活動形態を維持することが可能である地域。

2) 「日勤勤務団員がいるが、一方で交代勤務団員もそこそこいる」 21分団：今後は交代勤務職員の増加傾向が見込まれる

(ラッパ隊、頸城第三、上越諏訪、上越第二、上越直江津、上越津有、上越有田、大島第一、板倉第一、南大湯、安塚小黑、三和美守、上越新道、名立北、吉川旭、吉川中央、吉川尾神、三和上杉、上越第四、上越和田、清里第一)
 日勤勤務の団員が多数派であるが、同時に、交代勤務の団員が3割を占める。現状においても、活動への参加人数の確保が難しくなり始めている。

3) 「交代勤務団員が多い」 11分団：消防団活動への参画を恒常的に求めることが難しい

(上越北諏訪、西大湯、中郷第二、板倉第二、柿崎下黒川、上越谷浜、柿崎川西、頸城第一、中郷第一、上越八千浦、東大湯) 交代勤務団員が3~5割を占め、消防団活動に毎回参加を求めることが、現実的に難しいことが想定される。